

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：42681

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10456

研究課題名（和文）子どもの健康を支える保育所看護職の能力向上のための学習プログラムの開発

研究課題名（英文）The Study for Development of Nures's Learning Program in Early Childhood Care and Education

研究代表者

及川 郁子（OIKAWA, IKUKO）

東京家政大学短期大学部・短期大学部・教授

研究者番号：90185174

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、保育所看護職が保育職とともに、子どもの健康支援者となるために必要な能力を向上させるための学習プログラムを開発することである。「子どもの健康を支援する力」「子どもの権利を擁護する力」「組織の役割を協働して遂行する力」「自己を教育・研鑽する力」の4つの構成要素を軸に、新任期、中堅期、ベテラン期の3段階のレベル別に分け、レベル毎に、レベル目標、行動目標、学習内容、学習方法を明示した。また、レベル別の評価方法や参考資料なども掲載し、自己学習や研修会等で活用できるようにし、「保育所等で働く看護職の看護実践～キャリア形成に向けた学習ガイドブック～」として作成し、冊子体を配布した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

作成した学習ガイドブックは、文献や調査等をもとに4つの構成要素を軸に開発したもので、保育所等で働く看護職が個々に能力を開発、維持、向上させながら、自らのキャリア形成をしていくうえで指針とすることができる。また、看護職として一定水準の継続教育を行うための教育内容や学習方法が体系的に組み込まれており、これまでにない学習プログラムである。

本ガイドブックを活用して、自らの職場に必要な看護実践能力の指標を明確にし、看護実践能力を自他の適切な評価のもと、子どもやその保護者への安心、安全な健康支援を提供するとともに、ともに働く保育者など福祉職との協働・連携をより一層図ることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a learning program to improve the abilities required for nursery nurses working alongside childcare workers, enabling to become health care providers for children.

Based on these four components; "Ability to support children's health" "Ability to protect children's rights" "Ability to undertake collaborations through role" "Ability to educate oneself and study diligently", participants were divided into three levels; Newly Appointed, the Middle Rank and the Experienced, and clarified the level goals, behavioral goals, learning content and learning methods for each level. In addition, evaluation methods for each level and reference materials for learning were also published for use in self-study and workshops in the form of a booklet created and distributed under the title "Nursing Practices of Nureses Working in Early Childhood Care and Education : A Study Guidebook for Career Development"

研究分野：小児看護学

キーワード：小児看護 保育施設 健康支援 学習プログラム キャリアデザイン 学習ガイドブック

1. 研究開始当初の背景

近年、女性の社会進出に伴い、従来の保育所、幼稚園、認定こども園に加え、家庭的保育、小規模保育、事業所内保育、居宅訪問型保育などさまざまな保育が展開されている。そして、すべての子育て家庭を対象に、地域のニーズに応じた多様な子育て支援を充実させることが示され、地域の保育所等も重要な役割を担っている。保育所等を利用する子ども数は年々増加傾向にあり、子どもたちの健康問題や事故予防に対応すべく、アレルギー対応、感染症対策、事故防止や事故発生時の対応ガイドラインなどが出されている。また、2018年4月から保育所保育指針の改定が行われ、一層の健康支援の充実が期待されている。

しかしながら、保育所等に勤務する看護師、保健師、助産師などの看護職（以下、「看護職」という）の配置基準はなく、認可保育所において3割程度であり、配置形態や専門性の課題が指摘されている。特に子どもの健康教育や保護者への保健指導、疾病や障害のある子どもへの対応などについては自信が持てないという報告もあり、子どもや家族の健康支援者としての役割を十分に発揮するに至っていない。また、看護基礎教育、卒業後の継続教育では、保育所等の看護職に特化したカリキュラムはなく、ほとんどが一人職場であるために体系的な学びを行うことも難しい状況にある。

2. 研究の目的

本研究は、保育施設で働く看護職が、保育職と共に子どもの健康支援者となるために必要な能力を向上させるための学習プログラムを開発し、看護基礎教育終了後の教育システムのあり方について検討することを目的とする。具体的には、①保育施設で働く看護職に必要な能力や獲得方法の現状や課題、保育職が実施している健康支援の内容や学習状況、看護職との協働などについて調査を実施する。②調査結果や文献等から、保育施設で働く看護職に必要な学習プログラムの基本的枠組みや要素を抽出し、教授・学習方法を含めたプログラム案を作成し実践する。③学習プログラムの実践、評価の分析を通して得られた結果をもとに、「保育所看護職の学習プログラム」として提案し、保育所等に勤務する看護職に向けた教育システムのあり方について提言する。

3. 研究の方法

以下の方法で順に研究を実施した。

(1) 実態調査

① 質問紙調査：保育所看護職の体系的な学習プログラムを構築する基礎研究として、保育所看護職の保健活動の実態と研修状況を把握するため、保育所に勤務する看護職を対象に郵送による質問紙調査を実施し、量的分析を行った。

② グループインタビュー調査：質問紙調査結果をもとに、保健活動の実態と実施にあたっての影響要因等を明確にするためグループインタビュー調査を実施し、質的に分析した。

(2) 文献検討ならびに(1)の実態調査をもとに、学習プログラムの構成要素やプログラムに必要な内容を検討した。

(3) 学習到達度に関する実態調査：作成した学習ガイドブックの自己学習評価項目（学習到達度）をもとにWeb調査を実施し、保育所等で働く看護職の看護実践に必要な学習の経験年数別（レベル別）習熟度を検討した。

調査にあたっては、研究者の所属する研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

(1) 保育所看護職の保健活動と研修に関する実態調査

保育所における保健活動 28 項目について保健活動の実施状況と保健活動実施のために必要な能力について調査を行い 209 名の保育所看護職の回答を得た。その結果、保健活動の実施割合 80%以上が 16 項目であったが、実施割合 40%台の項目も 2 項目あった。保健活動のために必要な能力として、優先度が高い項目は専門的知識の 22 項目、次いで職員間の連携、発育・発達の理解などであった。活動の実施状況、必要な能力について、回答者の属性との関連を調査した結果、経験年数が 2 年未満とそれ以上において統計的有意差がみられた。特に職員間連携では保健計画や感染予防に関する連携、子どもの健康管理に関する連携など、すべての項目で経験年数2年目以下と10年目以上の実施割合に有意な差があった。これらのことから、およその目安として経験2年目以下の新任期、3~6年目の中堅期、6年目以上のベテラン期の3段階で実践が積み上げられていると示唆された。

また、研修会の機会が、年間 3 日以内もしくは研修の機会が無いと回答した割合が 54%あり、経験年数 5 年以下の研修会参加が低く、活動状況と合わせ新任期の学習の必要性が示唆された。

(2) グループインタビュー調査

前述の実態調査から、保健活動には保育施設での経験年数や設置主体等が要因となっていることが明らかになったため、経験年数 2 年以下、経験年数が 3~9 年、経験年数が 10年以上、かつ公立保育施設と民間保育施設に分けたグループインタビューを実施した。

その結果、各期の実践の特徴が明らかになった(図1)。

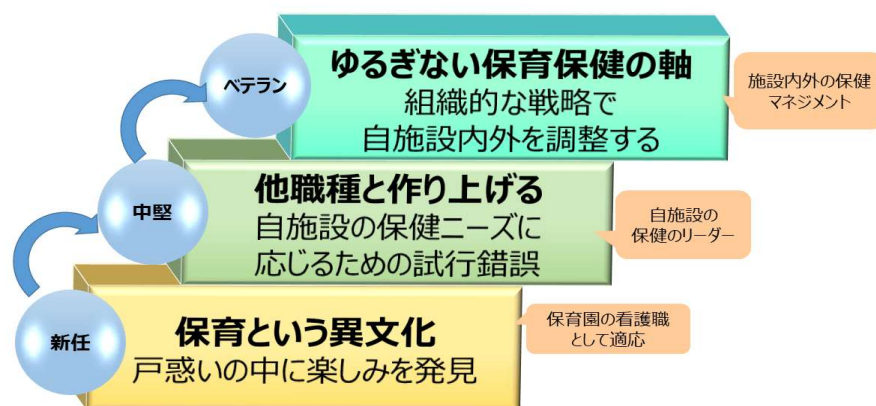


図1 新任からベテランの保育所看護職の実践の様相の変化

新任期(1~2年目)は、看護師と他職種の衛生面での認識の相違や保育所という場での子どもの体調判断の加減が掴めないなど戸惑いをいだき、保健業務の時間を管理できないことや、子どものニーズを感じながらも踏み込めない自分自身に不甲斐なさを感じていることもあった。しかし、その中でも毎日違う子ども達の姿や多様な子ども達の発達から学び、保育士の技を取り入れながら子どもたちに健康を伝える機会を持ち、やりがいを感じるなど、楽しさを見つけていた。これらのことから、新任期は【保育という異文化】を経験しながら、看護職としてのありたい姿を模索していた。

中堅期(3~5年目)では、子どもの体調判断や保育職とのやり取りにもさじ加減が分かってくることで、保育職の相談役になる、家庭保育を見据えて子どもに必要なケアを保護者へ伝えるなど、個々の状況に応じたニーズに対応する力が向上していた。保育所全体の保健レベルを向上させるために、組織全体をアセスメントし、管理職と情報共有のうえ、ともに意思決定を

行うなど組織的な体制づくりへの戦略を見出していた。これらのことから、中堅期は【他職種と作り上げる】保健体制があり、自施設の保健ニーズに応えるために試行錯誤しながら、リーダーシップを発揮していた。

ベテラン期（6年目以上）は、保育職との認識のずれはあることが前提の上で、相互理解できる関係性を構築していた。これが職員の信頼、また地道な職員教育に成果を見出す結果にもなっていた。自施設内外でパイプを作りながら、地域への育児支援も展開するなど、【ゆるぎない保育保健の軸】を持ち、戦略的に施設内外を調整していた。

（3）保育所等看護職の看護実践能力の構成要素（4つの力）

上記の調査結果や文献検討により、学習プログラムの軸となる構成要素を検討した。日本看護協会のクリニカルリーダーでの看護実践能力は、〔ニーズを捉える力〕〔ケアする力〕〔協働する力〕〔意思決定を支える力〕の4つが示されている。あらゆる施設と場が想定されているものの、健康児も含めた保健活動を子どもが成長発達する集団生活の場で提供する保育所では馴染みにくい表現もあった。本プログラムでは、組織役割遂行力や自己教育力を組み入れ、子どもの集団生活の場を支える看護の実践能力を図2に示す4つの力で構成した。



図2 保育所の看護実践能力の構造

子どもの健康を支援する力：対象となる子どもやその家族の個々のニーズ、また集団生活を営む集団のニーズを捉え、それぞれの人・集団・状況に適した方略を判断し、保健活動（ケア）を実施・評価する力である。【子どもの健康管理】【個別に配慮を要する子どもの支援】【子育て支援】【リスクマネジメント】の4項目で構成される。

子どもの権利を擁護する力：乳幼児は自らの感じていることや欲求を他者に言葉で伝えることが発達途中である。子どもの心身の苦痛に気がつき、代弁者となり、子どもの生きる権利・守られる権利を擁護する力である。【コミュニケーション】【健康管理を通じた調整】【個別的な配慮を要する子どもへの対応】の3項目で構成される。

組織の役割を協働して遂行する力：子どもの健康と安全を守り、健やかな成長発達を支える保育保健および地域の乳幼児保健の質を維持・向上するための、他職種とともに取り組む力である。【コミュニケーション】【組織の理解・協働】【地域連携】の3項目で構成される。

自己を教育・研鑽する力：自己の保育所等における看護実践能力を向上するために、リフレクションする力、他者への教育から成長する力、よりよい看護を目指した探求をする力である。【自己啓発・学習】【教育】【研究】の3項目で構成される。

(4) 学習プログラムの構成と内容

学習プログラムは、概要（作成の経緯や目的）、実践のための学習内容と学習方法、実践能力の評価、の3部構成とした。

実践能力獲得のために、新任期、中堅期、ベテラン期の各期に沿って、4つの実践能力毎にレベル目標と行動目標を設定した。また、行動目標を達成するために、どのような知識、技術を習得すれば実践に結び付くかを学習到達度として具体的に明記した。

レベル別学習到達度は、学習内容、学習方法（自己学習、OJT、研修）を明示し、自己の学習状況を評価するために5段階評価基準を設け、定期的に評価できるようにした。自己学習にあたっては、参考となる文献やガイドラインなどを参考資料一覧として示した。

調査結果からも自己学習やOJTだけでは難しい実践内容については、集合による研修案をレベル毎に提示した。研修内容や方法を確認するために行ったプレ研修会では、研修前後での知識の向上や学習意欲に変化がみられ、肯定的な評価を得ることができた。

また、自己評価による学習到達度とは別に、他者（職場の管理者など）による実践能力評価とその評価基準を設け、フィードバックを受けることができるようにした。

全52ページ、「保育所等で働く看護職の看護実践～キャリア形成に向けた学習ガイドブック～」として作成し、研修会等を通して実践能力の向上、普及を図っている。

(5) 学習到達度の実態調査

これまでの研究結果から、保育所看護職の実践能力向上のためには新任期から経験と学習を積み重ねる体系的な支援体制が必要とされている。開発した学習ガイドブックをもとに、組織的な支援体制を構築する基礎調査として、学習ガイドブックに示した「学習到達度（看護実践を構成する4領域（子どもの健康支援162項目、子どもの権利擁護33項目、組織役割の協働した遂行47項目、自己教育・研鑽26項目）」について、「4. よくできる、3. できる、2. 不十分、1. できない」の4段階評価の実態調査を行った。

660件の有効回答を分析対象とした。保育所看護の経験年数の分布は、新任期22.7%、中堅期33.5%、ベテラン期43.9%であった。多重比較の結果、中堅期とベテラン期の間では習熟度に201項目(75%)で有意な差が認められた。新任期と中堅期では141項目(52.6%)に有意な差が認められた。看護実践を構成する4領域別では、子どもの健康支援の防災・災害対策の18項目で、新任期と中堅期、中堅期とベテラン期のいずれの間でも有意な差が認められず、経験のみでは習得されないことが明らかになった。子どもの権利擁護は、新任期と中堅期で2項目(6.1%)、中堅期とベテラン期で12項目(36.3%)と、経験年数による習得に有意な差がある項目が最も少ない領域であった。組織役割の協働した遂行は、新任期と中堅期は24項目(51%)、中堅期とベテラン期は41項目(87%)と、中堅期からベテラン期に習得する傾向があった。中でも地域連携に関する項目は、新任期と中堅期は0項目、中堅期とベテラン期は全9項目で習得に有意な差があり、中堅期以降に知識・技術を習得している傾向であった。自己教育・研鑽では、新任期と中堅期は10項目(38.6%)、中堅期とベテラン期は18項目(69.2%)に有意な差があった。リフレクションに関する項目は、新任期、中堅期、ベテラン期のいずれの間でも有意な差が認められず、実践が経験になりにくい傾向があった。

今回の結果から、習得度合いが低かった項目は、子どもの発育・発達の評価、防災・災害対策、倫理的課題、リフレクションであり、現場での経験と自己学習では学習が十分に行えていない可能性が示唆された。今後は更に分析を進めながら、より効果的な人材育成、組織体制について検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中山静和、鈴木千琴、川口千鶴、及川郁子	4. 巻 26
2. 論文標題 保育所看護職が専門職として目指している事-アンケート調査の自由記述のテキスト分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育と保健	6. 最初と最後の頁 16～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木千琴、中山静和、川口千鶴、及川郁子	4. 巻 26
2. 論文標題 保育所看護職の保健活動と研修に関する実態調査<第1報>	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育と保健	6. 最初と最後の頁 19～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木千琴、中山静和、川口千鶴、及川郁子	4. 巻 26
2. 論文標題 保育所看護職の保健活動と研修に関する実態調査<第2報>	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育と保健	6. 最初と最後の頁 26～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山静和、鈴木千琴、川口千鶴、及川郁子	4. 巻 78：3
2. 論文標題 保育所看護職における学習に関する国内文献検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 253-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川郁子、川口千鶴、中山静和、鈴木千琴	4. 巻 42
2. 論文標題 保育所看護職の学習プログラム開発に向けた基礎的研究(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京家政大学生生活科学研究所報告	6. 最初と最後の頁 7-11
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川郁子・川口千鶴・中山静和・鈴木千琴	4. 巻 41
2. 論文標題 保育所看護職の学習プログラム開発に向けた基礎的研究(1)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京家政大学生生活科学研究所研究報告	6. 最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 及川郁子・朝野春美・鈴木千琴・須藤佐知子・宮前尚子、他
2. 発表標題 養育が気になる子どもと家族への支援 ～医療機関と保育所の連携～
3. 学会等名 日本小児看護学会第30回学術集会テーマセッション
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木千琴・須藤佐知子・宮前尚子・及川郁子、他
2. 発表標題 保育所で働く看護職のための学習支援を考える
3. 学会等名 日本小児看護学会第32回学術集会テーマセッション
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮前尚子、須藤佐知子、鈴木千琴、及川郁子、他
2. 発表標題 養育が気になる子どもを保育所等で支える看護
3. 学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会テーマセッション
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木千琴、及川郁子、須藤佐知子、他
2. 発表標題 保育所看護職の看護実践に必要な知識・技術・態度の習得度に関する調査 ～ 保育所看護経験年数による検討
3. 学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木千琴、宮前尚子、須藤佐知子、及川郁子、朝野春美、並木由美江
2. 発表標題 保育園看護職と語ろう(4)～保育所で働く看護職のための学習支援を考える
3. 学会等名 日本小児看護学会第32回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 及川郁子、川口千鶴、鈴木千琴、須藤佐知子、他
2. 発表標題 保育所看護職と語ろう：保育所看護職の卒後教育について考える
3. 学会等名 日本小児看護学会第29回学術集会テーマセッション
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木千琴・中山静和・川口千鶴・及川郁子
2. 発表標題 保育施設で働く看護職の保健活動実施状況と学習機会の実態
3. 学会等名 第24回日本保育保健学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山静和・鈴木千琴・川口千鶴・及川郁子
2. 発表標題 保育所看護職が目指していること～アンケート調査自由記述のテキスト分析から～
3. 学会等名 第30回全国保育園保健研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	川口 千鶴 (KAWAGUCHI Chizuru) (30119375)	順天堂大学・保健看護学部・客員教授 (32620)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	朝野 春美 (ASANO Harumi)		
研究 協力者	鈴木 千琴 (SUZUKI Chikoto)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	須藤 佐知子 (SUTOU Sachiko)		
研究協力者	中山 静和 (NAKAYAMA Shizuka)		
研究協力者	並木 由美江 (NAMIKI Yumie)		
研究協力者	宮前 尚子 (MIYAMAE Naoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関